

公園をみる・観る

掌の命、終わる ～幼いツバメへのレクイエム～

ツバメの幼鳥を拾った。山口市内の某施設。生垣の根元でバタバタともがいていた。

普通、巣から落ちたトリのヒナは人間が安易に助けようなどと考えてはいけない。巣から落鳥するようなヒナは、最初から生存競争の敗者として自然淘汰される運命かもしれないし、ヒナを案じる親鳥がどこかから視ていて助けようとする事もあり得るからだ。

しかし、目の前でバタバタともがくツバメを放置することも出来ず、周囲を見回しツバメの巣が無いこと、親ツバメがいないことなどを確認し、そお～と掌に載せ観察してみる。負傷している様子は無い。羽はつやつやと濡れ羽色に輝いているから病気では無いだろう。飛行中何かのアクシデントで墜落したのか？

梅雨空を猛スピードで飛び交い子ツバメに与える餌を探し回るツバメたち、多いときは一日に500回以上も餌探しに励むという元気で働き者の印象を持っていたツバメだが、この子は疲れ果てた様子でハンカチに包むとぐったりと目を閉じ続け、羽をばたつかせることも無くなった。

兎に角、公園のレンジャーに保護を託そうと車にのせた。信号待ちで停車したとき、頭をなでてやると大きな黒目を見開いて辺りを眺め回すがやがてまた力なく目を閉じる。

今までツバメをこんなに身近に観たことが無かった私は、ツバメがとても可愛らしい見目形をしていることに心が高鳴った。大きな黒い瞳、青みがかかったピロードのような羽、幼い者の持つ特有の愛くるしさ、そして気のせいかな、すべてを私に委ねたような安心しきった様子を見ていると、まさに「窮鳥、懐に入らずんば獵師もこれを撃たず」の心境だ。何とか私の掌にやってきたこの幼い命を救いたいと思った。

レンジャーの診断の結果によると、「栄養失調」とのこと。保護したツバメは生後40日くらいだそうだが体重が10.3gしかなかった。正常に生育していれば18gくらいから大きいものなら26gもあるそうだ。そのツバメは早速、療養のためのカゴに収容されレンジャーの手によって市販のミルワームという生餌を少しずつ与えられた。ツバメは口に入れてもらった餌を自ら嚥下している。何度か生餌を口に入れてもらっているうち冷たかった体温もいくらか上昇していった。

「大丈夫、元気になるよ」とのレンジャーのお墨付きに安心し帰宅したが……

ツバメは翌日死亡した。

スワロー（ツバメ）とは、希望・勤勉の象徴とされ洋の東西を問わず古くから人々に親しまれてきた。日本ではイネの害虫を食べてくれることから農家の人々に喜ばれ、西洋でも「幸せの王子」の話は多くの人に感動を持って今も読み継がれている。今季の二番子として生まれ、生後40日余りで死んでいったこの幼いツバメは、人々と親しく交わる時間も与えられず、大事な種の保存の義務さえも果たすことなく運命に呑み込まれて逝った。たまたま見た幼いツバメの命の終焉に、弱小生き物の生きることの意味について考えさせられると共に、行きずりの恋を失ったような寂しさを感じた。

(土×土)